

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	英國の文人と新聞雑誌 : 雜録
Author(s)	夏目, 漱石
Citation	龍南會雑誌, 73: 27-36
Issue date	1899-06-27
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5326">http://hdl.handle.net/2298/5326</a>
Right	

# 英國の文人と新聞雜誌

漱石

文人詩人の資格を具へて居つても眼丁字なしと云ふ様な者は詩想を表彰する事が出来ぬから論外である。文章を綴り何れを成す力量があつても陶淵明や寒山拾得の様な人々は自分の作を天下後世に傳へたいと云ふ考がないから是も特別である。然し一般に文學者と呼ばれ又自ら文學者と名乗る者は獨りて述作をして獨りで楽しんで居る様な者は極めて鮮い。況んや文を賣つて口を糊するといふ場合に至れば何かの手段を以て世の人に自作を紹介せよと企てる。新聞雜誌は此紹介物として頗る便利なるものであるからそこで文人と新聞雜誌との關係が生じてくる。此關係を不秩序ながら少くも述べよう。

英國で新聞の起源は何時かと云ふと今を去る事幾んど三百年即ち西曆一六二二年に『ナサニエル・バタター』と云ふ男が週報とでも譯すべき一種の新聞に似たものを發刊し始めたのが元祖になつて居る。元來英國の貴族は倫敦に邸宅を構へては居るが一年中此紅塵界裏に起臥するもので無し。三百六十五日の中で三分の一位を都で暮れ残る三分二は皆田舎へ引拂つて仕舞ふ。舊田舎へ行けば眼先が變るので色々面白い事もあるが矢張冷煩くは何んな事があるだらう位は思ひ出しもするし又知り度もなつてくる。そこで此等の人々は皆抱への通信者を倫敦に置いて珍事異聞は勿論社會萬端の出來事を一週に一回宛田舎へあてゝ報道せしめたるものである。固より通信者中には上手も下手も流行するものも流行らぬものもあつたらまい。處で前に述べた『バタター』と云ふ男は此道にかけて餘程巧者な者と見え、所々方々の注文を引き受けて到底一人では手が棒になる程働いても間に合ないと云ふ場合

になつた。茲に於て先生一計を案じて自分の一週間内に纏めた材料を印刷に付して毎週依頼者に發送する事にした。是が即ち週報である。

是が發端で夫から漸々盛大になつて十七世紀の終には五六種以上の新聞が出来る迄又『レストレン』以後は紙面の体裁も完備まで大に發達をえた云ふ様なもの『ミルトン』や『ドライデン』が投書家であつたといふ事實の外に別段取立てゝ云ふ程の事もない。少なくとも文學上には是と云ふ功績も見えなかつた。處が女皇『アン』の時代に至つて彼有名な『タトラ』と『スペクテーター』が前後踵を接で見れた。此は純然たる文學雜誌であるが惜しい事に長持がしなかつた。『タトラ』は一七〇九年から一一年迄續いたが『スペクテーター』の方は一一年から一二年で終を告げた。此二雜誌を發行したのは誰も知つて居る『アヤソン』と『スチール』である。尤も『タトラ』の中には『スウィフト』や其他の人が手傳つた號もあると云ふ説であるが兎に角此二人が發起人で又主なる執筆者であつた。偕其中には何んな事が書てあるかと云ふとは當時の人情風俗を清新流暢な文体で諷刺的又は批評的に叙述したものである。夫故に今から見ると其時代の俱樂部の有様や下世話の模様が歴々と目に観る如く面白く分る。例へば英國の習慣に四月一日を皆が馬鹿になる日と云てある。即ち此の日には互々に人を嘲し合ふて面白かる。何所其所に化物が居るから觀て來いと云はれて往つて見ると何も無かつたり。又は八百屋へ行つて銅を買つて來いと云ふから買ひに行くと謝はられたり色々な滑稽を演ずる。其中に斯様に人を欺きたり女小供を馬鹿にして得意がる連中が出來てくる。已は此五年間に百何人を馬鹿にえた杯と云つて自慢する様な者の事が『スペクテーター』を見ると面白く書てある。面白く書てある中に訓戒の微意が見ゆる。即ち『アヤソン』や『スチール』は是を以て幾分か世道人心

は種々城んもの考があつたのである。未から今一つは此時代の文學趣味は發達して居らなかつたので或は發達して居つても現今とは大に經過を異にして居つたのであるが『アチソン』は可成此嗜好を正路(彼の所謂)に引き入れんと企てた。現今では詩聖として崇拜されて居る沙翁を『ライマート』と云ふ當時の批評家は犬の吠るが如く馬の嘶くに似たかと云つた位である。今でこそ布鼓を持して雷門に向ふの觀があるが此時代の批評眼は總て佛蘭西を手本としたので實際沙翁も『ミルトン』も空前絶後の大詩人として社會一般から今日の如く許されて居らなかつた。處が『アチソン』は當た通俗な文體を用ひて一生面を開いたのみでなく斯の如き文壇の批評に對しても多少時流と其選を異にきて居た。『スベクテート』の中で沙翁と『ミルトン』に關した論文が十篇ばかりあるが皆此二人を賞讃したものであらう。就中『ミルトン』の失樂園を辯護して立派な叙事詩だと云ひ張つたのは『アチソン』の飛脚である。幾分か十八世紀の習氣を擺脫しなかつたかも知れぬが先づ今世紀の批評眼に近づいて居つたのは此男である。以上述べた譯で『スベクテート』は今でも斷らず英國で出版する。決して普通の新聞雜誌の様に一時限りのものとしては取扱はない。

後世に斯の如き影響のある『スベクテート』が當時にはどうであつたかといふと矢張非常な人氣で倫敦の市民は雜誌の到着を待ち兼ねて讀むのを樂みにした位である。何故左様であるかと云ふと二つの原因がある。從來の新聞雜誌は皆政治的で毫も文學上の趣味が無かつたのと此に類する小説と云ふものが未だ行はれて居らなかつた處へ突然時好に投じたからである。『リチャードソン』が『パミラ』を著したのは十五六年後の事である。『ボモレット』は未だ生れて居らないし『フェイルヤング』は並六歳の童兒である。『デフォード』は居つたけれども一七一九年に『ロビンソンクルソー』を書いた

迄は政治上の著述のみをして居つたから此時に出版になつて居つたものは『スウィフト』の『テール、ホフ、ア、タツア』位のものである。然も是は別種に属すべき性質のものである。其所で『スペクテーター』が幅を利かしたのも無理はなし。二三年で廢刊まで仕舞て、其相續者が容易に見はれなかつたのは矢張り時勢よりも進歩を過ぎて居つたに違ひないと『ゴス』杯は評えて居る。

此外當時の文學者で新聞事業に従事したものは随分ある現に『フヒールギング』は『ツル、ベトリオット』と云ふ新聞を發行して居つた。『スモレット』は『ブリットン』の主筆であつた。『ジョンソン』でさへ議會の傍聴録を書いたと云ふ話がある。尤も此時分は毎日議會へ傍聴に出掛て行つて翌之を紙上に掲載する様な簡便法は無かつたので。どうすると云ふと閉會後になつてから善加減に胡論な辯論を繋ぎ合せて漠然たる報道をなすに極つて居つた。處が『セントルメンズ・マガジン』を發行した『ケイヴ』と云ふ男が工夫をえて一改良を企てた。其趣向はと云ふと閉會中に二三の社員を院内に忍び込ませる。一生懸命に演説を傍聴する。散會後近所の酒屋で一口飲み乍ら聴た事を文章に綴つて草稿を作る。其草稿を心得のある人が改竄をして新聞に掲載すると云ふ手筈にした。『ジョンソン』は『ケイヴ』の爲に此心得のある人として生捕れたのである。そこで先生は多年の間草稿を受取つては汚害しい天井裏に潜んで傍聴録を訂正した。『ジョンソン』でもあるべきものが斯様な下らぬ事で糊口しなければ立行かんと云ふは情ない話であるが情ない中にも愉快な事があつたので『ジョンソン』は人も知る如く頑固な『トリ』派の一人である。此頑固な先生が議院の喧嘩を自由自在に書うと云ふのだから面白い先生は何時でも『トリ』が勝つて『ホイッグ』が負けた様に作り替へたさうである。先斯の如く大分文人も新聞に従事はしたが此は文人の資格で従事したのではなく云はゞ筆で世渡り

をずる爲に文學に縁のない事をえて暮えて居つたと云つても差支ない。其から五十年許は別段の事もないか降つて一七六九年一月二十一日に一種の怪物が突如として『バブリック、アドヴァンタイザ』の紙上に現はれた。此怪物は自ら『ジュニアス』と名乗つて居るが其正体は誰れも突き留た者がない。只毎日紙上に出現しては當時の名門要路の者共を誰彼の容赦なく片端から攻撃するのみである。其攻撃の方法は皆手翰体にして當の敵に與へたもので固より政治上の議論と人身攻撃を合併したるに過ぎないが其文章が如何にも犀利直截で且縦横排指の勢があるといふので新紙の賣高を倍徒したのみならず現今に至るまで文學史中の一著述と目されて居る處が前に云ふ通り其作者がどうしても分らない。政府でも斯んな者が跋扈しては治安妨害だといふので種々の方面から物色するが分らない。世間は又好奇心に驅られてありとあらゆる探索をしたが分らない。『ジュニアス』は自ら其文中に余が秘密函は余一人なり而して余と共に滅するものなりと公言して居るが果せるかな此秘密函を打開たものがない。先づ色々な方面から觀察を下して『サー、フヒリツナ、フランシス』と斷定するものが多い。又或人は左様ではない是は全く『テンブル』の惡戯だとも云つて居る。何ちらにまても日本人に關係はないが文學者と新聞と云ふ問題には關係があるから述べたまでの事である。從來の窺十八世紀の末から十九世紀の初は英國文學史中尤も多事の時である。新派勃興の時である。從來の窺を打破して新機軸を出さうと云ふので『ウオーグウオーズ』と『コルリヤ』が相談をして『リ、カル、ムラツア』(一七九八年)を出版して滿天下を相手に喧嘩を買つた時である。此の文運隆盛の期に際して數多の文學者が必然の勢から段々新聞雜誌に接近してくると同時に新聞雜誌も漸々文學的に傾いて評論は勿論詩歌小説に至る迄が此利器を藉つて世間に紹介さるゝ様になつた。其勢は滔々と今

目送進で來たが毫も退く氣色が無い。夫故に何新聞には是が出た何雜誌は是を載せたど一々指摘する暇もないし又實際の所書で居る當人もさう詳しい事は知らないから先きのこと一つ二つの挿擧を述べよう。先新聞の方から片付よう。此時代に新聞に従事した文學者の中には「ハヅリット」が居る。『モリニン』、『ハヅリット』は戯曲の評論を連載した事がある。「ラム」も居る。「節六片志の割で」モリニン、ハヅリットは筆を執た事がある。『ユルリツヤ』も某一人である。此人に就ては面白い逸話がある。『モリニン』の演説を筆記に来て命ぜられた。『ユルリツヤ』は早く屏を取らうと思ふて朝七時頃から出掛を賣る。退窟の爲に睡氣が差して遂々「ビット」が立つて演説するといふ十分許前に立つて居る最中そのなかから肝心の文句は一言も聞き取らなかつた。然し態々演説を聴きに來て寐て仕舞たでは役目が濟まないから仕方なしに出駄等目な想像を以て筆記を作りあげて素知らぬ顔で新聞に載せた。處を此筆記が非常に立派な出來であつて「ビット」の演説も勿論美事なものであつたけれども「モリニン」の筆記には到底及ばなかつた位である。然し世間は何も知らないで新聞通りの事と心得て類々に評判が高くなつた。時に「カンニン」も「云ふ人が「モリニン」の編輯局へ遊びに來て話しの序で「ハヅリット」の演説を大變賞た。夫迄は善かつたがその日を滑らまてあの筆記者は記憶力法なも腦力の方が餘程善いようと思はれるといつたのでさういふ筆記の贗物であると云ふ事が露見えて仕舞た。

言ふ事を聴かながた話がある。『カニライル』が『バンス』の論文を草して『ミチフレイ』に見せた時に餘り放縱荒誕だと云ふので半分許り削つて残る半分に潤色を加へ様とした。すると『カニライル』が承知しない。出さないなら丸で没書にするがいい。出す位なら皆出すが善と極めつけた。其所で『ミチフレイ』も仕方がないから世間でどんな冷評があるが先づ危険を冒してやつて見様と云ふのでどうく其なりで出した。是が今傳つて居る『バンス』の傳である。

雜誌の事は此位にして又新聞に戻つて少く述様。此時分『タイムス』新聞が始めて起つた。是は『ミチフレイ』と『オルター』といふ親子の盡力で成立した新聞であるが最初の主筆が『ミチフレイ』であつた。此の『ミチフレイ』が退社する時適當の後任かない。色々詮索した揚句遂に『サウシー』の處へ持つて行つてどうか『ミチフレイ』の後を引き受けて呉れまいかと頼んだ。其時の條件には先づ年俸が三千磅で夫に利益配當をつける。仕事は一週に三四回論説を書く許りであとは只社の方針に關して一般の監督をまて呉れれば善いと云ふ事であつた。然るに『サウシー』は條件も何も聞かぬ先から眞平御免だと云つて斷つた。後から中間に立つた周旋人に紙面を遣つて縱令どの様な報酬を受けても田園の居宅を棄てゝ仕慣れた勉強を已める氣はないと書いた。尤も此人は雜誌には投書をまて居つた男で此時の収入は年に七八百磅のものであつたと云ふ話だ。『タイムス』の主筆となるは總理大臣よりも名譽だと云ふのは現今の諺で當時には適用出来ぬとした處で此時分でも『タイムス』は非常な勢力を有して居たのである。一時他の新聞が何うかして『タイムス』の霸權を奪つて之を壓倒して遣うと企てた事がある。乃ち投書家通信者編輯員を擧つて『タイムス』に優ることも劣らぬ人のみを蒐集な様と云ふ計畫を立てゝ金錢に目を呉れずに俊才を網羅を始めた。すると金の威光は恐ろしい者で今迄



『タイムズ』に關係まで居たものがちらちらと裏切をえて殊方馳加はる様になつたから是なら大丈夫と勇で見たが根のから語らなかつた。人間も揃ふし論説も雜報も『タイムズ』より優つて居るにも關らず『タイムズ』は依然として新聞世界を濶歩まで切角の經營慘憺も何の利目もなかつた。即ち實價は何うでも御株で賣れますと云ふ地位に達まで居つたのだから外の新聞とは新聞が違ふと云ふ新聞であつたのだ。其主筆になつて下されと手を下げて頼みに來たのを『サウシー』は苦まがかり割前の芝居見物を斷はる様に無雜作に謝絶したのである。是も一風な男と云つて宜しからう。

冷々の新聞に就て面白い噺がある。此頃『モーニングクロニクル』に時々『サツキンス』の投書が出たか原稿料が安過ぎると云ふので『サツキンス』が不平を鳴き出して其極は斷然投書を廢めて自分で一の新聞を發行まで見様かと云ふ氣になつた。『サツキンス』と云へば當時名代の文人である。其『サツキンス』が主筆と云ふ振込ならば成功は槌を以て地を撃つよりも慥かな事である。其所で腕の利た人物を招聘し功者な探訪を傭込み主筆の給料は二千磅以下之に準すといふ譯で悉皆準備が出来上つた。先づ室内には銀製の墨壺に『ローズ』樹の卓を控へ参考用の書物は魯西亞皮の表装に金の縁を取り使給仕には一樣の仕着せをさせて一寸主筆に手紙を渡すにも銀盆に載せて恭く上ると云ふ様な九で御殿風の仕掛であつた。夫で一八四六年正月二十一日に愈『デイリー・ニュース』の初號が發刊になつた。其論説欄には主筆『サツキンス』自ら筆を執つて讀者諸君に告ぐと云ふ題目で吾新聞の目的は天下の弊風を洗し社會の害毒を掃絶まで萬民の幸福を鞏固にするにありと滔々と大まな勢で述べ立てた。物事が是迄進んで順當に進歩すれば夫さりの事であるがさう參らなかつたから可笑い。先づ初號から十號迄は善かつたが愈十一日目に萬民の幸福を鞏固にするといふ意氣込の大將が避易降參

の體で社主の處に辭職願を出して自分は到底主筆は務まらない是非今日限り御免を蒙る無理に遭つて居ると思はれて社舞かゝると云ふ杜撰であつた。社主も驚いた。切角當にきて事業を興した發頭人が平日並か立たないの條論説を書かなくて辭職願を書たのはから一通りの狼狽ではない。漸く『マヨロオオオ』を後釜に据えて『マツキンズ』は書信を紙上に連載するといふ契約で世間は矢張り『マヨロオオオ』の著者が主筆である体に裝ふてやつて一時を糊塗し去つた。然る『マツキンズ』はどちも倫敦に居るのは新聞が苦にならうと溜りなかつたものと見え効々行李を理きて飄然と『マヨロオオ』を指之差旅行を玄ね。此旅行先で書初めたのが有名なる『マヨロオオ』である。

先づ此位置所で結束させ様。此稿は極めて亂雜であるが一括して云へば初の新聞紙は舊政治的のものである。政治的でないものも文學的趣味に乏しかつたのである。夫か段々發達して有ゆる種類の文學漸く新聞雜誌の厄介になる。と云ふ時代になつた。是に連れて文學者と新聞雜誌との關係が漸く密切に或つて來て現今では文學者と新聞雑誌に關係を持たないものはない様になつた。と云ふのが一篇の注意である。

さきくさの式、其うたゝの寐の相さ、まゝして、其未だのともを浪

假寐の寐醒は快きものにはあらず、と知事ながら日此一度は恰も課業の如くなるこそ淺まき次第なれ。今日も何時の間にかあり一睡覺め來れば例に依りて心地惡き事言はん方なし。此不快竹箒の如きち筆にて掃み去らんとて書き流したるは即ち是れなり。夫れ夢は空想と謂ふと雖も、其資料も經驗の範圍を出ず。されば過去に徴して事實に似たるもあらん、未來に徴してまさ夢となる